

自主シンポジウム 4

授業中における大学生の無質問行動をめぐる教育心理学的諸問題

企画・司会者	祐宗省三 (武庫川女子大学)
話題提供者	無藤 隆 (お茶の水女子大学)
話題提供者	David Shwalb (光陵女子短期大学)
	Barbara Shwalb (名古屋商科大学)
話題提供者	仲野好重 (大手前女子短期大学)
話題提供者	祐宗省三
指定討論者	祐宗省三

大学や短大の授業時間に学生が教官(員)の講義にたいして、一般に、質問しない傾向が強い。質問時間を特に設定しても殆ど質問しないのが通例のようである。大学院学生にしても大同小異である。これは一体なぜか。どうしてこうなのか。小・中・高の児童・生徒はどうなのか。大学や短大の学生の授業中の「私語」は、現在大きな問題となり、いくらか研究もすすめられている。しかし、「無質問」ないし「不質問」については、しばしば話題にはなるが、研究としては、ほとんど取り上げられていない。この主題については、いろいろな角度から、種々の要因を設定してアプローチすべきで、単純に結論めいたことを導出すべきではなかろう。これは、心理学とくに教育心理学の分野でもじっくり研究すべき重要課題と思われる。そこで上記の方々からそれぞれ話題を提供していただき、この主題をめぐる論議することとした。

無藤 隆 「なぜ質問をしないのか、どうすれば質問をするのか」

私は以前に大学生の質問行動について調査をした(マッギル大学の犬嶋と共同)。一つは、質問紙でその頻度と理由を尋ね、その相関から次のような結論を出した。日本の大学生は、相手である教師がどう思うか、またまわりの大学生がどう思うかを気にして、質問できない。特に、悪口として受け取られるとか、目だつとかを嫌がる。また、日本の大学生が北米と比べ、確かに質問行動が少ないことを確認した。また、上記の理由が北米では強くはないようである(まだサンプルがすくないが)。

では、日本の学生を相手にどのようにすれば質問行動を活発にできるのか。学会で大学教師の授業実践を報告する場を設け、その教育方法の開発を行うべきだと思うので、私の実践的経験のいくつかを述べる。1. 質疑の時間をいきなり設けても難しいので、前もって課題を与え、小レポートを書かせて発言できるように

して、指名する。2. 教科書の該当部分を予習させ、授業時間の半分を講義、半分を質疑とする。さらに、コメントと質問を書けるようにし、それにはレポート返却時に口頭で全体に、また個別にレポートに書き込

んで答える。3. 人数の少ない演習の場合は、毎回テーマを与えて、小レポートを出させ、各自に発言させ、また討論させる。

予習と書くことを重視している。口頭の場合、そして討論に発展させる場合がまだうまくいっていない。実感に基づいて発言できるテーマや共通の体験をもとにすること、またどんなつまらないような発言でも許容し、それを生かす教師の態度などが必要であろう。

David Shwalb & Barbara Shwalb (大学生の無質問行動に対する教員の意識調査: 日米の比較)

大学教育の現在の問題点の一つは、教員と学生のコミュニケーション関係です。アメリカ人のごく少数の日本教育研究者による日本の大学教授法に関するイメージは「一方的講義」に限られているといわれています。それに対して、日本では、アメリカの高等教育についての情報が豊かで、イメージとして、アメリカの大学のクラスでのコミュニケーションは優れており、教員と学生の間は自由な話し合いが出来、討論中心だと思われているようです。しかし、イメージと現実のズレは、両国とも大きいと思います。実は、どこでも教室でのコミュニケーションは、難しいことです。特に討論と学生の質問の仕方は日米でも問題でしょう。つきましては、予備的研究として、愛知県と米国のユタ州にある私立大学の商学部の教員に3枚の選択式アンケート調査を行いました。対象者は愛知で45人、ユタで24人でした。

その結果、教員の経験はユタで大学院時代に教員の講義の助手(teaching assistant)として勤務した者が多く、愛知ではそのような訓練が殆どなかったです。教員の学生時代の記憶によると、ユタの人は「活発型

」で、日本では「学生としてあまり質問をしなかった」ようです。学生については、ユタ、愛知でも学生は積極的でなく「受け身的」なものだそうです。

一般的に両大学とも、無質問行動は、受講者数が少なければ少ないほど、問題ではなくなるそうですが、愛知の大学の方が少人数の講義が少ないことが分かりました。ユタの教員によると、無質問と別にして「意味がない質問」や「質問が多すぎる」という声が多く見られました。

最後に、質問する学生としない学生の動機について文化比較をしたところ共通点が多かったのですが、少し差もありました。例えば、無質問の原因はユタの方が「先生を恐れる」という回答が多く、愛知の方が「質問しないのは国民性の特徴」、「先生達は質問しないでほしい」、「学生と教員の地位上のギャップが大きい」というような回答が見られました。

この結果によると、教室におけるコミュニケーションと無質問とは日本だけではなく異文化間にかけて高等教育の大きな問題点だということがあきらかになりました。

仲野好恵「クラスにおける質問行動—日米の文化的考察—」

日本の大学とアメリカの大学での大きな違いの一つは程度の差はあるにせよ、授業中の教師と学生のやりよりの質の違いであろう。日本の大学では、演習形式の授業以外は教師が一方的に授業を進め、学生は受け身的態度で必死にノートをとるか、隣とひそひそ話、あるいはコックリコックリと居眠りをはじめめるか・・・。一方、アメリカの大学でよく見られる光景は、学生から教師に対しての発言が多いことである。発言の内容は、質問に始まり、反対意見、感想、自己流理論と様々であるが、とにかく教師と学生の間には活発なやりとりがある。

日本とアメリカに見られるこれらの差は、どこにその原因があるのだろうか。まず考えられることは、相互依存的な価値の強い日本文化と、個を主張するアメリカの独立精神文化の差である。よって、学生は授業という一つのシチュエーションを「自分自身と教師」とのやりとりの場として捉えているのか、あるいは「自分を含む全体と教師」のかかわりの場として捉えているのかは興味深い点である。また、アメリカによく見られるディベート教育は、学生が自分自身の考えや疑問点を明確にするための訓練になっている。日本では、他者に対して正面から議論をすることはあまりなく、むしろ水面下での根回し的な手続きを通して全体のコンセンサスを得るのが特徴である。

ひとりひとりの学生を、教師はどのように評価しているのか。日本の教育現場での傾向として、試験の点数や偏差値が努力の結果として重視され、それに至るまでの、思考が経験する紆余曲折のプロセスは評価の対象にならないことが多い。よって、大学教育における授業とは、単に知識情報の提供の場ではなく、教師からなげかけられる事柄を通して学生自らが思考の紆余曲折を経験する場であるという認識が、学生には希薄なものに映るのではないだろうか。

以上のような観点から、日米の学生に見られる質問行動の違いに文化的考察を試みたいと思う。

祐宗省三「授業中に学生は何故質問しないのか」

無記名・自由記載方式で、大学生・短大生を対象としてアンケート調査を実施した。その結果、多く回答がよせられたが、予想外のものもあった。例えば、次のようなものである。「よく理解している友人に聞くほうが理解しやすい。」「めんどくさいから。」「単位はとれそうだから。」「分からないことが分からない。」「先生との間に壁がある。」「さっき説明した通り、なんていわれそうだから。」等々。「恥ずかしい」が最も多いが、これは予想した通りであった。